

NOTEBOOK

# あるべき未来に 進むために

---

# あるべき未来に進むために 6

芳流 (kaoru)

<https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=15403663>

ダイの大冒険, アバン, ヒュンケル, 子ヒュン

後半の「起」。

アバン 18 歳、ヒュンケル 8 歳。旅の途中の箸休め回。

ここからしばらくヒュンケル視点。彼が地上で生きることの意味。

# Table of Contents

- [あるべき未来に進むために 6](#)

# あるべき未来に進むために 6

## 第6章 旅路

少年は、太い木の枝に腰掛けながら、見渡す限りの小麦畑を瞳に映し、ため息を吐いた。

小麦畑の隣にあるのは、毬花の畑だ。

平野が広がるこの地は、ロモス王国を抱えるラインリバー大陸の穀倉地帯だった。

少年の肩のあたりを、オレンジ色の、足のないアンデッドモンスターがふわふわと飛んでいた。

時折、少年の背中を指先でつんつんとつつくものだから、少年に頭をたたかれていた。オレンジ色のモンスターは、少年に頭をたたかれ、頭にかぶったとんがり帽子が落ちそうになっていた。

「うるさいぞ、バケル。」

少年は、モンスターの方を見ずに注意をした。

バケルと呼ばれたアンデッドモンスターは、しょんぼりした様子で、少年の隣に腰を下ろした。

そうは言っても、彼は少年とは異なり、宙に浮けるし、体重もないのだから、枝に腰掛ける必要はなかったのだが、そこは付き合いというものだ。

少年は、吹き付ける風に、その銀の髪を揺らしながら、小麦畑を眺めていた。

地平線に、茜色の太陽が沈もうとしており、金の麦穂を焦がすように照らしている。秋播き小麦が、初夏の今、まさに収穫時期を迎えようとしていた。

見事な光景であったのだが、たわわに実った麦の穂を見ると、少年の気は重くなる。なんとなく、今日この後の展開が予想されるからだだった。

やがて、少年の上った木の下から、彼を呼ぶ声がした。

「そんなところにいたんですかー。下りてきてくださーい。」

彼の師であり、いまや保護者とも言うべき若い男が彼を見上げて

呼びかけた。少年の足の下で、両手を振っている。

少年は、返事をするのもおっくうになり、始めは無視を決め込んだ。

だが、木の下の子は、そんな彼の態度を気にすることなく、下から呼びかけ続けた。

「下りてきてくださいってばー。」

しかし、少年が動こうとしない様子を見て取り、彼は戦略を変えた。少年の隣に並んでいるアンデッドモンスターに呼びかけた。

「バケルー。」

途端に、アンデッドモンスターは、少年の背後から、彼を思いきり押した。

「なっ、バケルっ！！」

少年は抗議したが遅かった。不意を突かれて、彼の身体は枝から転げた。

少年は、寸でのところで、とっさに片手で枝をつかんで落下を食い止めた。

しかし、アンデッドモンスターは、にやりと笑うと、少年に向かって小さな火の玉を投げつけてきた。

少年は、自分から手を放し、火の玉を躲すと、地面に着地しようとした。

「はーい、そこまで。」

気が付くと、少年は、木の下の子に抱き留められていた。

よく見ると、男の足が地面から浮いている。飛翔呪文を使ったのだ。

男の腕の中で、少年は、暴れて彼に抗議した。

「離してくださいっ！！」

「いくらあなたでも、あの高さから落ちたら大変ですよ。バケルも、ちょっとやりすぎです。」

「先生がやらせたんでしょう！？」

その指摘ももっともなだけに、彼はばつの悪そうな顔をして、少年を地面に下すしかなかった。

大地に降り立った少年の肩に、バケルは、何事もなかったかのように乗ろうとした。少年は、無言でバケルを手で払った。

「ヒュンケル。」

アバンは、彼をたしなめた。だが、ヒュンケルは、アバンを横目でにらみつけた。

アバンは、咳払いを一つして、話題を変えようとした。

「話はまとまりましたよ。」

今日から1か月、この村に泊めてもらえます。ちゃんと食事つきですよ。」

アバンは、明るい話題かのように話をしたが、ヒュンケルの冷たい目線は変わらなかった。

ヒュンケルは、アバンをじっとりとした目で睨みながら、一応、師と仰ぐ男に言葉を返した。

「それで、今度は何をすればいいんです？小麦の収穫ですか？」

的確な指摘に、アバンは、返す言葉もなかった。ずれそうになった眼鏡を指で押さえてヒュンケルに聞き返した。

「・・・何故そうだと・・・。」

「あなたに2年も付き合っていればわかります。」

ヒュンケルは、ため息交じりに、指を折りながら言葉をつづけた。

「アルキード高原では、小麦の収穫。羊の毛刈りと、山羊の乳しぼりもありましたよね。ベンガーナ台地では大麦の種まき。時季外れには、大麦畑の地起こし。リンガイア北部ではリンゴの収穫とシカの捕獲。オーザムの港町では、底引き網漁船の手伝いとじゃがいもの収穫。」

タダで泊めてもらったことがありましたっけ？今までと全く同じでしょうが！」

アバンは、必死に弁明した。

「で、でも、お仕事を請け負えば、宿だけじゃなくて、食事もついてくるじゃないですか。その上なんと、お給料までいただけます。旅に路銀は必須ですよ。」

「この前立ち寄った口モス郊外の村で、村長に『児童の酷使は国際条約で禁止されています。子どもたちに必要なのは、労働ではなくて教育です。』って説教したの、誰でしたっけ？」

「酷使だなんて人聞きの悪い。私もちゃんと働いているじゃないで

すか。」

「俺も付き合わされてます。」

ヒュンケルは、アバンに畳みかけた。

「それに、あなた、貴族じゃなかったでしたっけ？所領からの税収はどうなっているんですか？」

「・・・ジニュアール家にはしばらく戻ってませんからねえ・・・。」

ヒュンケルは、それ以上アバンを責める気をなくし、ため息を吐いた。文句を言ったって、変わらないのだ。

ヒュンケルは、バケルを指さした。

「こいつは連れて行って大丈夫なんですか？」

「あ、それはもちろん。説明済みです。」

その言葉に、ヒュンケルは少し落ち着いた様子だったが、やはり機嫌は悪そうだった。

アバンは、ヒュンケルをなだめようとした。

「ヒュンケル、そんな顔しないでくださいよ。あなた、せっかくかわいい顔をしているのに。そんな悪い目つきをしてたら、台無しですよ。」

「カワイイー、カワイイー。」

アバンの言葉尻に、アンデッドモンスター・ゴーストのバケルが乗った。

二人の言葉に神経を逆なでされ、ヒュンケルの怒りが爆発した。

「俺にかawaiiさを求めないでください！！」

アバンがカール王都を出て2年。

彼らの旅が、2人だけのものから、3人というべきか、2人と1匹というべきか、とにかくメンバーが増えてからは1年が経とうとしていた。

ちょうど1年ほど前のことだった。

アバンとヒュンケルは、ベンガーナとリングアイアの国境付近の街に来ていた。

アバンはテランにしばらく滞在したのち、アルキードからベン

ガーナへと抜け、リングアイアを目指していた。

その途中、リングアイアとの国境付近の村に滞在していたときのことだった。

アバンは、宿屋で夕食を取りながら、その宿の女将の話を聞いていた。

「人魂ですか？」

アバンが聞き返すと、女将はうなずいた。

「3か月くらい前からかしら。街道に出るらしいのよ。墓場でもな  
いってのにね。人魂だけならともかく、暗闇で笑い声を聞いたとか  
いう話もあるし、拳句の果てに人魂でやけどした、とかいう噂もあるの。

そのせいで、リングアイアからの商隊が、この街に続く街道を嫌  
がっちゃってね。遠回りして、ベンガーナ王都まで行ってるらしい  
のよ。おかげで、商売あがったりよ。」

「それで、薬草とかの入荷も悪いんですね。」

アバンが言葉を引き継ぐと、女将はうなずいた。

「そうよ。薬草だけじゃない。料理で使うディルとか、サーモンの  
燻製、鹿肉のハムにリンゴのジャム。それに、なんといっても、ラ  
イ麦。こういった、普段だったらリングアイアから入ってくるものが  
今は止まっちゃって。困ってるのよね。」

アバンは、難しい顔をして悩んでいる様子を見せた。

「それは私も困りましたね……。薬草も補充したかったですし、  
ハーブも欲しかったんですよ。サーモンの香草焼きとか、おいし  
いですもんね。」

やや論点がずれたような気がしたが、ヒュンケルは何も言わずに  
黙っていた。すでに嫌な予感がしていた。

「こんな時にでも滞在してくれるのはうれしいからね。ゆっくりし  
ていてね。」

そういつて、女将は、アバンには、熱いコーヒーを、ヒュンケル  
には、はちみつを入れて甘くした紅茶を出してくれた。甘いお茶  
は、この地方ではよく飲まれているようであった。

アバンは、コーヒーの香りを楽しみながら、思案に暮れていた。  
こういう時のアバンはたいてい余計なことを言い出すということ



は、ヒュンケルにももうわかっていた。

アバンはつぶやいた。

「それにしても、街道に人魂、とはね。

気になりますね。ちょっと調べてみましょうか。」

予想通りの師の言葉に、ヒュンケルはため息を吐いた。

その日の夜、すぐにアバンは宿を出て、暗闇の中、リンガイアとの国境に向かって街道を歩いて行った。もちろん、隣にはヒュンケルもいた。

この日は月もなく、空は曇っていて、明かりになるものが極めて乏しい夜だった。

アバンは、宿の女将に小さなランタンを借りて、手に下げて持っていた。

ランタンのぼんやりとした明かりが、アバンとヒュンケルの間を照らしていた。

アバンがランタンを顔の高さにあげながら、ヒュンケルに尋ねた。

「これも、遠目に見たら人魂っぽく見えますよね。」

ヒュンケルはすぐに反論した。

「でも、ランタンの明かりなら、遠目でも、色ですぐにわかるんじゃないですか？」

アバンは右手の人差し指を立て、左右に振りながら答えた。

「そう思って見ればね。

人魂が出るところだって思っていると、そう見えちゃうもんですよ。」

「じゃあ、今までのうわさは、見間違い、とか？」

「どうでしょうかね……。笑い声とかやけどとかは見間違いじゃ済みませんからね。

さ、もう少し行ってみましょうか。」

そう言って、アバンは、ランタンを手に、陽気な足取りで、真っ暗な、それも人魂が出ると噂の街道を、人気のない国境に向かって歩いて行った。

しばらく歩いていくと、街道がわずかに隆起し始め、小高い丘の

ように、先が見通せるところまで出た。そこからは国境も見え、遠くに点々と、国境を示す杭が、一定間隔で何本も大地に刺されていた。

「もうすぐリングアイアですねえ。思ったよりも近いですね。」

「そうですね・・・。」

言いながら、ヒュンケルはあたりを見回した。

なんとなく、先ほどから見られてるような気配を感じていたが、アバンは表情を変えていない。ヒュンケルは、気のせいだろうかと思った。

ヒュンケルは、落ち着かない気分のまま、隣のアバンを見上げた。

「先生・・・。」

「どうかしましたか、ヒュンケル？」

そう言って、ヒュンケルを見下ろしたアバンの後ろに、不意にランタンでない明かりが灯った。

ランタンよりも赤い光は、左右に揺れながらアバンの背後で揺らめいていた。

ヒュンケルは身構えた。

「先生っ！」

「え？」

アバンが振り返ると、赤い光は途端に消えた。

そして今度は、ヒュンケルの左側、またアバンの背に隠れて見えない方に、赤い光が揺らめいた。

その馬鹿にしているかのような動きに、ヒュンケルは不快になった。

まぎれもなく、意志を持っている。これはただの人魂なんかじゃない。

アバンの視界を避けるかのように、それでいてヒュンケルの目には触れるかのようにうごめく赤い光は、明らかにヒュンケルを挑発していた。

ヒュンケルが注意深く赤い光を目で追っていると、不意に、その光が視界から消えた。

ヒュンケルは虚を突かれた。

すると、一瞬の後、赤い光は、ヒュンケルの顔のすぐ前にその姿を現した。

小さな声が聞こえた。

—メラ。

赤い光から炎が噴き出し、ヒュンケルの顔面を直撃した。強い炎ではなかったが、至近距離から放たれた攻撃に、彼の銀の前髪が焦げた。

いきなり顔面に火炎呪文を放たれたヒュンケルは、熱や痛みよりも屈辱に身を焦がした。

「・・・上等だ。」

怒りに満ちた目で、ヒュンケルはつぶやいた。

同時に、ヒュンケルは、腰に下げた剣を抜いた。

「ヒュンケルっ！？」

アバンが止める間もなく、ヒュンケルは、目の前の赤い光に向かって切りかかっていった。

ヒュンケルの剣が空を切り、大地に突き刺さる。

「・・・外したか。」

「あ、あの、ヒュンケル・・・？」

「先生は黙っててください！」

ヒュンケルは、左右を素早く見渡すと、今度は、少し離れた草むらの上に赤い光を見つけた。

「そこかっ！」

呆然とするアバンの前で、ヒュンケルは、赤い光に切りかかる。その光は、草むらの上でダンスを踊るように揺らめいており、ヒュンケルばかりが本気になっているようだった。

ヒュンケルの力は、年の割には強く、すでに並みのモンスターなら仕留めることもできるようになっていた。

しかし、赤い光はゆらゆらと、おそらくヒュンケルをいらだたせるような動きで揺れ、彼の剣を躲し続けた。

その光景に、アバンはにやりと笑みを浮かべた。

「困った人魂さんですねえ・・・。」

そうつぶやくと、アバンはヒュンケルに呼びかけた。

「ヒュンケル～！ああいう実体のないものには、力技は通じません

よ。

こういうときは、スピードです。

わかりますね？」

ヒュンケルは、アバンの声に振り向くと、何かを思いついたかの  
ように構えを変えた。

それまで、上から振りかぶるようにしていた剣の動きを変え、水  
平に持った剣を横に薙ぎ払った。

「海波斬！」

ヒュンケルの剣圧が空を割く。

「ピッ！」

何かが避ける音なのか、人魂の声なのか、奇妙な音が聞こえた。

だが、十分な手ごたえを感じなかったヒュンケルは、さらに剣を  
繰り出す。

「もう1回・・・海波斬だっ！」

「ピーっ！」

今度は手ごたえを感じた。

ヒュンケルは、赤い光が踊っていたあたりに駆け寄った。

ふと見ると、オレンジ色の足のない、ふわふわとしたアンデッド  
モンスターが、足・・・というか、しっぽだったところを切られ  
て、地面の上で慌てていた。

「これは・・・ゴーストですね。」

駆け寄ってきたアバンが、地面の上に倒れたアンデッドモン  
スターを見てつぶやいた。

「人魂って、こいつですか？」

「そうみたいですね。あなたの海波斬でしっぽ、切られちゃった  
みたいですね。」

ゴーストは、しっぽだったものを両手で抱えて、おろおろとし  
ていた。

アバンはしゃがみ込むと、ゴーストに声をかけた。

「人魂さん。この街道で、道往く人を脅かしていませんか？  
か？」

ゴーストは、涙目になってうなずいた。

「それはちょっと困るって皆さん言ってるんですよ。」

もういいですかね？

・・・遊んでほしかったんですか？」

やはり、ゴーストは、涙目になってうなずいた。

「いたずら好きなのは、もう種族の性格みたいなものでしょうからしょうがないとして・・・もう少し、森の奥に行きませんか。ご案内しますよ。」

アバンがそう言うと、しっぽを抱えたゴーストは、懸命にうなずいた。

「それなら、いいでしょう。」

アバンは微笑んで、ゴーストに手を触れた。

「ホイミ。」

アバンは回復呪文を唱えた。

それを見て、ヒュンケルは声を上げた。

「何してるんですか、先生。こいつがまた襲ってきたらどうするんですか。」

だが、アバンは、こともなげに答えた。

「もうそんな心配はありませんよ。」

たちどころに、切れたしっぽは元通りになった。ゴーストはうれしそうに宙を舞った。

「さあ、行きませんか。」

アバンがゴーストに手を差し伸べると、ゴーストは、そのアバンの腕にしがみついた。

「・・・あれ？」

アバンが困ったように笑みを浮かべた。

「もしかして、私たちと一緒にいきたいんですか？」

ゴーストは、アバンの腕にしがみついたまま、何度もうなずいた。

「・・・しょうがないですねえ。

まあ、でも、これも何かの縁でしょう。ご一緒しましょうか？」

「・・・先生、本気ですか？」

ヒュンケルは呆れた声を出した。

「だって、こんなに懐いちゃったし。旅も多い方が楽しいですよ。」

街道で人魂騒ぎを起こすゴーストを連れて楽しいのか。ヒュンケルは同意しかねたが、口には出さなかった。

「・・・下手な情をかけるから、懐かれるんです。」

ヒュンケルは、何かを念頭に置いた言葉を口にした。

ヒュンケルの嫌味をものともせず、アバンは、ゴーストに語り掛けた。

「そうそう、名前も付けましょうね。」

バケル、なんてどうでしょう。」

ヒュンケルは、アバンのセンスがイマイチなのは知っていたが、それも、口には出さなかった。

しかし、次のアバンの発言は聞き逃せず、ヒュンケルは師に強く抗議した。

「ヒュンケルと韻を踏んでてかわいいですよ。兄弟みたいでしょう？」

「先生っ！いい加減にしてください！！」

怒りに震えるヒュンケルの上空で、オレンジ色のゴーストは、嬉しそうに宙を舞っていた。

ラインリバー大陸穀倉地帯の村で、8歳のヒュンケルは、収穫した小麦の束を、農家の裏手へと運んでいた。

小麦の穂は、ある程度の束にまとめられており、根本は麦の茎で縛られていた。

ヒュンケルは、慣れた手つきで、農家の裏庭のむしろの上に、麦束を摘んでいった。

この家のおかみさんが、ヒュンケルに声をかけた。

「ごくろうさん。縛っておいてくれたんだね。ありがとう。」

そう言ってしゃがむと、ヒュンケルの運んだ麦束を一つ手に取った。

「上手に縛れてる。慣れてるね。」

「あちこちでやりましたから。」

ヒュンケルは苦笑しながら答えた。

アバンとともに、アルキードでの小麦の収穫や、ベンガーナでの大麦の収穫を請け負ったことがある彼からしてみれば、特に難しい

作業ではなかった。

農家のおかみさんは、ヒュンケルににっこりとほほ笑みかけた。  
「小さいのにしっかりしてるね。もうどこでもやっていけそうだね。」

彼女は立ち上がると、ヒュンケルを家の中に促した。  
「ごくろうさん。作業は終わりだろう？ちょうどトゥルデルニークが焼き上がったんだよ。食べていきな。」

ヒュンケルは、戸惑いながらも、彼女に続いて家の中に入ってしまった。

アバンとヒュンケルは、ここ数日、この農家の離れを借りて生活していた。

おかみさんに続いて母屋に入ったヒュンケルは、あたりを見回すと、アバンの姿がないことに気付いた。

「先生は？」

キッチンでトゥルデルニークを皿に盛りながら、彼女は答えた。  
トゥルデルニークは、この地方独特の、筒状の甘いパンだった。小麦が庶民の口にまで回ってくる余裕のあるこの地方らしいお菓子だ。

「ああ、なんか、村長のところに呼ばれていったよ。なんか、備蓄がどうか言ってたね。任せておいた畑の麦はきれいに収穫してあったよ。仕事の早い人だね。」

「そうですか。」

そういえば、この家の裏手に、麦束の山があったが、あれはアバンが積んでおいたものだったようだ。

「子どもは難しいことはいいよ。さあお食べ。」

「ありがとうございます。」

ヒュンケルは、目の前に出された甘いパンの乗った皿に、素直に礼を言った。

出された筒形のパンをちぎりながら頬張るヒュンケルに、おかみさんが水を出した。砂糖とシナモンの甘さが口に広がった。

そうしていると、この家の主人が、ヒュンケルたちのいるダイニングにやってきた。手には何やら紙の束を持っていた。

「貢納量を計算しろってさ。」

「毎年のことだけど、面倒だねえ。」

「こんなの、計算できねえもんなあ・・・。」

「あ、今来てるあのお兄さんにやってもらおうか。」

農家では、収穫したうちの一定量を領主に地代として納入する。要するにその計算をしろということなのだが、どうもそういった作業は苦手な夫婦のようであった。アバンに頼もうかと話し合っていた。

ヒュンケルは、主人がばさりと置いた書面に目をやった。

簡単な計算が書いてあった。

ヒュンケルは、おずおずと、夫婦に声をかけた。

「・・・俺が書きましょうか？」

この家の主人が、不思議そうな目でヒュンケルを見た。

「うん？坊主、計算できるのか？」

「簡単なものなら。」

ヒュンケルが頷くと、主人は、陽気に笑った。

「そりゃあいい。頼むよ。」

ヒュンケルは、甘いパンを食べ終わると、主人がテーブルに置いた書面を手を取った。ざっと目を通してから顔を上げた。

「とりあえず、今年の収穫量を教えてくださいませんか。小麦と・・・大麦も書かれていますね。」

それを見て、おかみさんが感心した声を上げた。

「字も読めるんだね。あのお兄さんに教わったのかい？」

「・・・ええ、まあ・・・。」

もちろん、あのお兄さんとは、ヒュンケルと同行しているアバンのことだ。

彼女は、ヒュンケルにアバンのことを問いかけた。

「先生って呼んでたよね。お兄さんじゃないの？」

「いえ、違います。」

「じゃあ、親戚？」

「いいえ。俺は孤児だったんで、身内はいないんです。」

すると、首をかしげて主人が尋ねた。

「・・・うん？お前とあの人、どういう関係なんだ？」



「俺に剣を教えてくれているんです。だから先生です。一緒に旅をしています。」

ヒュンケルは、簡単にアバンとの関係を答えた。彼が、どういう経緯でアバンと一緒にいることになったのかは言いたくなかったので、あえて省いた。

主人は納得いかなそうな顔をして首をかしげていた。

「よくわかんねえなあ。あの兄ちゃん、身内でもないお前と旅をして、剣を教えてくれているのか。ずいぶん変わった関係だな。」

「そうですか？」

「そうだろ。見たところ、あの兄ちゃん、言葉遣いもきれいだし、学もあるから、それなりの家の人なんじゃないのか？」

「まあ、貴族だとは聞いていますが・・・。」

ヒュンケルの言葉に、主人は裏返った声を上げた。

「貴族！？そりゃあますますおかしいなあ。そんなお人が何でまた旅なんか・・・。」

すると、おかみさんが口をはさんだ。ヒュンケルに問いかける。

「文字も、計算も、あの人に教わったのかい？」

ヒュンケルは答えた。

「簡単な文字は、俺を育ててくれた人が大体は。あとは先生に教わりました。」

その答えを聞き、彼女は優しく微笑んだ。

「坊や、いい人に拾ってもらったねえ。文字が読めて、計算もできるって、大きいことなんだよ。いろいろな仕事ができるようになるからねえ。食うには困らないよ。」

ヒュンケルは、その言葉に、強い反発を覚えた。自分は、好きでアバンと一緒にいるわけではない。アバンが彼の唯一の家族を奪ったからだ。

アバンに対する強い恨みは、今も消えずに彼の中にあった。最近はその燃えるような強い負の感情を表に出すことは減っていたが、それがなくなったわけではない。

ヒュンケルの脳裏に、砂となって崩れ落ちた亡き父の姿がよみがえった。そしてその父の亡骸の前で、白刃を手にとっていた勇者。

あんな男が「いい人」のわけではない。

その一方で、この2年の間の様々な旅路が彼の中を通り過ぎて行った。

食事の支度をしてくれた。剣を教えてくれた。本も読んでくれた。あの男は、仇であるはずなのに、どうして、自分に優しくするのだ。

ヒュンケルは、様々な感情の渦に吞まれそうになり、何も言えずにうつむいたまま口をつぐんだ。

おかみさんは、黙ってしまったヒュンケルに戸惑い、彼に声をかけようとしたが、言葉が継げなかった。どうも、何かまずいことを言ってしまったらしいことには気づいた。主人は、困ったように、二人を見比べている。

すると、そこへ、彼らの息子が帰宅した。ヒュンケルとは別の畑の収穫に向かっていたのだ。おかみさんはほっとして、彼の息子に声をかけた。

「ただいまー。」

「おかえり。」

「あ、俺もパン食べたい。」

「はいはい。」

この夫婦の息子のうち、一番下の子がこの子で、ヒュンケルよりも少し年上だった。

子どもが場に現れると、急に雰囲気明るくなる。重くなっていた空気が和らいだ。

少年は、出された円筒型のパンを急いで口に詰めると、食べながら、この日の予定を両親に伝えた。

「あっちの畑の収穫は終わったよ。麦束は裏に積んどいた。」

「ありがとう。」

「食べたらまた外行く。フットボールやるって約束してきたんだ。」

「陽が落ちる前には帰って来いよ。」

目の前で流れる家族の会話に口をはさめず、ヒュンケルは、黙ったまま、手元の書面に目を落としていた。この一家の会話など、彼には関係のないことだった。

しばらくすると、少年は出されたパンを平らげて、手を払った。

「さて、行ってくるか。」

そうして、ダイニングテーブルについたままのヒュンケルに目を止めた。

「一緒に行こうぜ。」

「え？」

「人数多い方が楽しいから。来いよ。」

「でも・・・。」

ヒュンケルは、急に現実に戻された。

突然差し伸べられた手に戸惑っていると、少年の母親がヒュンケルの背中を押した。

「あ、いいよ、計算は後で。遊びに行っておいで。」

「よし、じゃあ、こいつ連れてくよ。」

少年は、ヒュンケルの手を引いて、家の外に出て行った。

アバンは、麦の備蓄と、そのために必要な収穫量の確保について、長老の相談に乗ると、その家を出て、仮住まいへと足を進めた。

その途中で差し掛かった村の広場には、この村の少年たちが5～6人、転げまわってボールを追いかけて遊んでいた。

「フットボールですか。いいですねえ。」

アバンは、ほほえましい光景に目を細めた。

ふと、その子供たちの輪の中で、見慣れた銀の髪が踊っているのに気が付いた。

アバンは、驚いてしげしげと見つめたが、やはり間違いはない。村の子どもたちと一緒にボールを追いかけているのは、ヒュンケルだった。

アバンは、始めはしばし茫然としていたが、やがて、その穏やかな面に嬉しそうに笑みを浮かべた。

「・・・他の子と、一緒に遊べるようになったんですね・・・。」

感慨深げにつぶやいた。

アバンがその光景を眺めていると、ちょうど、ヒュンケルが勢いよくボールを蹴ろうとしたところで、彼の前をさっとオレンジ色の

影が横切った。

不意に視界に邪魔が入り、一瞬、ヒュンケルの足が止まると、横から別の少年が、ヒュンケルの足元のボールをかすめ取った。そして、思い切り、反対側にボールを蹴った。

「やったー。」

「いえーい。」

少年たちの歓声が響く。

ヒュンケルの怒鳴り声が聞こえてきた。

「バケルっ！卑怯だぞ！お前、足ないんだから、メンバーに入っちゃダメだろ！！」

だが、敵チームの少年がバケルをかばった。

「こいつはこっちチーム。」

「ソウソウ。」

バケルも尻馬に乗る。

そうして、バケルはヒュンケルにべえっと舌を突き出した。

その光景を遠目に見ていたアバンは苦笑して呟いた。

「あ、これは怒りますね。」

案の定、ヒュンケルの怒った声が響いてきたが、そのうちまた子どもたちはゲームを再開した。

バケルもちっかり参加している。

大人たちの間ではモンスターへの抵抗がまだ残っており、バケルは、村では人目につかない軒下や畑にいることが多かったが、子どもたちの間では人気のようだった。

子どもたちは、しばらく転げまわっていたが、彼らは、やがて、川の方に向かってぞろぞろと歩いて行った。汗をかいたので水浴びでもしに行ったのだろう。

「子どもには、子どもの社会がありますねえ。」

アバンは、ヒュンケルたちに声をかけずに、その場を離れた。

子どもたちは、下着だけになると、勢いよく川の中に飛び込んだ。

ヒュンケルも村の子たちに倣い、川の水に身を浸し、汗を流した。

汗をかき、ほてった体に清流が心地よかった。

だが、子どもたちが川に入り、汗を流すだけで済むはずがなかった。

すぐにそこかしこで、水の掛け合いが始まった。

例外にもれず、ヒュンケルも村の少年に頭から水をかけられた。

「うわっ。」

ヒュンケルが腕で顔をかばうと、楽し気な笑い声が響いてきた。なんとなく気分が高揚し、ヒュンケルも水をかけ返した。まだ初夏になったばかりであったが、子どもたちがたてる水しぶきがきらきらと陽光にきらめいていた。

不意に、ヒュンケルの後ろにいた少年の一人が声を上げた。

「うわっ……。お前、その背中、どうしたんだ？」

「え？」

ヒュンケルは首を曲げて自分の背中を見ようとしたが、うまく見えない。

「何かついてるか？」

ヒュンケルは尋ねた。

少年は、よく把握してなさそうなヒュンケルの答えに戸惑っていた。

「いや、ついてるっていうか……。それ、傷痕、なのか？」

「え？」

ヒュンケルは、ますます首を傾げた。背中に傷なんかあったらどうか。

「よくわかんないな。俺から見えないし。」

「い、いや……。痛くないならいいけどさ……。」

すると、彼らの間近で、ひときわ大きな水しぶきが上がった。

にゅっと、水面からオレンジ色の頭が顔を出した。

「おい、バケル。お前、水浴び平気なのか？」

水をかけられたヒュンケルが慄然として尋ねた。

「ヘイキー。スキー。」

ヒュンケルはバケルの頭に両手を乗せた。

「なら……。浸かってこい！」

ヒュンケルは、バケルの頭を下に向かって押し、川に沈めたが、

おぼれたら困ると思ったのか、すぐに手を離した。

バケルは水面から頭を出したり引っ込めたりしながら、ヒュンケルから遠ざかり、ゴーストラしく、ケケケと笑った。

「変なやつー。」

バケルを見て、村の少年たちが笑った。

この村に滞在してしばらくたったある日の夜、ベッドに入ったヒュンケルに、アバンはゆっくりと声をかけた。

「今日ね、手紙を出してきたんです。」

この世界では、ルーラを使える者はそれほど多くはなかったが、大都市には必ず何人もの、ルーラをマスターした魔法使いや賢者がいた。

そのため、大都市間の信書の配達には、彼らは重宝されており、ルーラ屋と言われていた。

大都市間での手紙のやり取りは、ルーラ屋に託せばそれで足りた。しかし、周辺の小さい村や町へは、必ずしもルーラで行ける者がいるわけではなかったのも、小さな村や町あての親書は、しばらくの間、大都市に置かれた信書箱にとどめ置き、受取人に取りに来てもらうか、あるいは、そこから先は別料金で、ほかの人間に配達を頼むしかなかった。

ヒュンケルにも、この世界の仕組みが少しずつ分かってきていた。アバンが手紙を出した、というのを聞き、とっさに、ルーラ屋のことが頭に浮かんだ。

アバンはつづけた。

「ロモスにね、私の親友一家のいる村があるんです。しばらく会っていなかったから、会いたいなと思って、手紙を出してきました。

次はその村に行こうと思います。

明日、発ちますよ。

村の子ともせっかく仲良くなったのに、寂しいですか？」

ヒュンケルは、布団にくるまり、アバンに背を向けたまま答えた。

「別に……。いつものことですから。  
何でそんなことを聞くんです？」

「あなたが楽しそうだったからですよ。  
次はもっと、いい出会いがあるといいですね。」

穏やかなアバンの声が聞こえてきた。

余計なお世話だ。

ヒュンケルは思ったが、口には出さなかった。

眠りにつこうとした彼の胸の中に、ほんの少しのさびしさと、温かさがよぎったような気がしたが、きっと気のせいだと、ヒュンケルは思った。